

嫉妬

とか

承認欲求

とか、

そういうの全部捨てて

田舎

にひきこもる

所存



1





《ディア》

街の商家の娘。

昼はラウの店で働き、家では両親から迫害される毎日を送っていたが、結婚式当日にラウとレーラに裏切られ、ジローとともに出奔する。



《ラウ》

街の最も大きい商家の一人息子であり、ディアの婚約者。誰とでも軽い調子で話すお調子者で、口が上手。



《ジロー》

ディアの家で用心棒として雇われている無精ヒゲのおっさん。隣国との戦争に参加したことがあるらしいが、その過去は謎が多い。

～登場人物紹介～



《レーラ》

ディアの異母妹。
天真爛漫な性格で、両親からは蝶よ花よと可愛がられ育てられる。



《クラト》

村で暮らすジローの幼馴染。
過去に何かあったようでジローとは不仲。



《村長》

ジローの出身村の村長。
老人ばかりになった村の将来を憂いている。



《ジェイ》

街の花屋の息子。理由はわからないものの、レーラに執着しているようで……。

嫉妬とか承認欲求とか、
そういうの全部捨てて田舎にひきこもる所存

1

プロローグ『名前のない関係』 006

第一話『羨望と孤独』 008

第二話『家族の定義』 019

第三話『地獄と孤独』 034

第四話『希望と逃避』 056

第五話『至誠通天』 075

第六話『過去と贖罪』 096

第七話『急追』 115

第八話『元婚約者の独白』 140

第九話『狐疑と安穩』 161

第十話『利己心と真意』 183

第十一話『求不得苦』 211

第十二話『寄り添い、慈しみ合う』 242

番外編『冬ごもりを満喫する』 268



プロローグ 『名前のない関係』



くつくつと煮立った鍋を火から下ろして、出来上がったスープをお皿に盛りつける。

お皿は二枚。ひとつは私の分。もうひとつは同居人の分である。お肉が好きなのために、こちらの皿にはお肉を多めに入れてあげる。

食卓に運んで、パンを入れた籠かごを添えれば今日のお昼ご飯の完成である。

私はエプロンを脱いで、馬の手入れをしている彼を呼びに外へ出た。

「ジローさん。お昼ご飯できましたよー」

呼びかけるが返事はない。聞こえなかったかなと思い、馬小屋のほうまで歩いていくと、芝生の上座つてくつろいでいる馬の姿が見えた。

「あれ？ 馬を放つてジローさんはどこに行っちゃったの？」

と思つたら、よく見ると彼は馬のお腹を枕にしてすやすやと昼寝をしていた。馬も若干困っている様子で、私が近づくと助けを求めるようにブフッと鼻を鳴らした。

「もう、ジローさん。起きてください！」

大きめの声で呼びかけると、ジローさんはビクッと体を揺らしてガバッと上半身を起こした。馬はようやく解放されたとばかりに立ち上がって、自分で馬小屋に帰っていく。

「んあ？ あれーディアさん。どうしたのオ？」

「どうしたのじゃないですよ。馬が枕にされて困ってましたよ」

「いいのいいの。俺ら仲良しだから、馬も喜んでんだって」

寝ぐせの酷い髪を掻きまわしながら、ジローさんはいつも通り適当な返事をする。お昼ご飯ができたと告げるとようやく立ち上がって手を洗いに行った。

食卓についた私たちは、揃って食事を始める。

「おっ。肉がたくさん入ってる。うま、ディアさんの作る飯はどれも美味いよなア」

「多めに作ったから、足りなかつたらお代わりしてくださいね」

美味いから食い過ぎちゃうんだよなアと言いなながらもお代わりをするジローさんを見て、自然と笑いが溢れる。

いつも通りの穏やかな食卓。でも少し前まで私は、こんな平和な時間を過ごせるようになるとは思ってもしなかった。嵐のような出来事に打ちのめされて、自分を見失いかけていた私に手を差し伸べてくれたのが、このジローさんだった。

「あー美味かった、ごちそう様。片づけは俺がやるからなー」

「じゃあお願いしますね。ありがとうございます」

まるで仲の良い夫婦のような会話を交わす私たちだが、一緒に住んでいるだけで恋人同士なわけでもない。それどころか、友人ですらない関係から始まって、不思議なことにこうして家族のように過ごしている。

他人から見たら、私たちは何に見えるだろう？

人買いと、買われた娘に間違われたことはある。友人と呼ぶには、お互いのことを知らなさすぎ

る。親子にも兄妹にも見えない私たちは、自分たちでもこの関係を表す言葉が見つからない。

でも私は、この家族でも恋人でも友人でもないジローさんと過ごす時間がこれまでの人生の中で一番穏やかで幸せで、なによりも大切に思っている。

だから名称なんて必要ない。

明日も明後日も、こうしてジローさんと穏やかな日々が過ごせればそれでいい。それ以外、私は何も求めていない。



第一話 『羨望と孤独』



「ディアちゃん、ちょっとこっち手伝ってー」

「はい！ 今行きます」

炊き出しの準備が終わったと思ったら、またすぐ別の持ち場に呼ばれて手伝いに行く。朝から始まった収穫祭は、夕方にある演舞に向けて佳境に入っていた。追い立てられるような忙しさに目が回りそうになる。

私は女将おかみさんたちと一緒に裏方として朝から働き通しだったから、ひと段落したところで少しもお腹に何か入れておきたかったが、呼ばれてしまったので食事は諦めるしかない。

「このあと男衆おとこしゅうに食事を振る舞うからね、それが終わればアタシたちも休憩できるから、もうひと頑張りよ」

顔に疲れが出ていたのか、私を呼んだ女将さんが背中を叩いて励ましてくれる。気を遣わせて申し訳ないなと思ひ、できるだけ笑顔でハイと返事をした。

私の住む町で、毎年行われる秋の収穫祭。

実りをもたらしてくれた大地の精霊に感謝を捧げるために行われるこのお祭りは、娯楽の少ないこの町に住む私たちにとつて、とても楽しみにしている大事な行事だ。

特に若い娘は、祭りで綺麗な衣装を着て踊り子を務めるので、年頃になると皆、張り切つて準備にいそしんでいる。

同じ歳の頃の娘たちが楽しそうに舞い踊る中、私は暗い舞台裏からそれを見ていた。

祭りは若い男女の出会ひの場でもある。

若い男性も祭りでは踊り子のそばで捧げものの担ぎ手となる。男たちの力強い興担ぎは壮観で、夜の松明の灯りに照らされてとても幻想的な光景に見える。そこに衣装を身に着けた娘たちが踊り子として参加して、男女が協力して感謝の舞を捧げる祭りとなつてゐるのだ。

この同じ年に踊り子と担ぎ手を務めた男女は、一緒に練習することが多いせいか、その後恋仲になることが多く、祭りの前からその後もしばらく若者は皆浮き立つたようにふわふわと落ち着かない雰囲気になる。

最後にその若者たちの演舞が終わつたところで、朝から続いた祭りがようやく終わり、裏方の女衆は表舞台の華やかさとは程遠いところで片付けに追われていた。

少し離れたところにある舞台の周辺では、熱が冷めやらぬ様子の子の男女がワイワイと談笑している

姿が見えた。

頬を上気させて笑顔で語り合う皆の姿はキラキラと輝いていて、裏にいる自分がすごく遠いところにいるように思える。

ふと見下ろすと、一日働いて薄汚れた自分の服が目に入る。汚れてもいいものを選んできたので、着古した服は余計にみすぼらしく私の目に映った。

舞台の人々と見比べると惨めになりそうだったので、無理やり目線を引き剥がして、片づけ作業に集中した。

「ディアちゃん。ここ片づけたら終わりにして大丈夫よ。今日は疲れたでしょ」

「あ、いえ。女将さんたちのほうが忙しくて大変だったでしょうから」

一緒に裏方作業をしている女衆おんなしゅうの人に声をかけられたので、羨ましげに舞台を眺めていたことに気付かれたらどうかと少し気まぎくなる。

「ディアちゃんもまだ未婚の娘さんなのに、毎年裏方なんて可哀想ねえ」

後ろから別の女将さんが声をかけてきて、かけられた言葉にドキンとするが、できるだけ動揺を表にださないよう平静を装って返事をする。

「……両親が、私は婚約者がいるからもう裏方でいいだろうって言うので……仕方がないですよ
ね」

彼女の言う通り、私は十八になるこの年まで祭りに参加できたことはなかった。

未婚の若者はほぼ毎年参加しているというのに、両親は私には婚約者がいるのだから、出合いの場に娘役として参加する必要はないと言って、かならず裏方作業に回されてしまう。

妹のレーラだけを可愛がる両親は、妹を着飾らせることにばかり熱心で、多分私には衣装代がもつたないから祭りに出させたくないだけなのだと思う。

私の家は、実母が幼い頃に亡くなっていて、その後父が再婚して後妻との間にレーラが生まれた。天真爛漫で可愛いレーラを両親は溺愛していて、私はあの家で娘として扱われていない。

私も祭りに参加したい、と昔言ったことがあるが、必要ないの一言で終わってしまった。

「でもねえ、親なら一度くらい娘の踊り姿を見たいと思うものだけどねえ。まあ許嫁いいなまけの方の意向もあるでしょうから仕方ないのかしらね」

言外に、親に愛されていないのね、と言われているように聞こえてしまって、上手く返答ができず曖昧に笑うしかなかった。

そのうち、我が家の事情を知る人が気を遣って話題を変えてくれたので、有難く思いながらそつとその場を離れた。

家族のことも、婚約者のこともできればあまり話したくない。

私の婚約者であるラウは、まだ子どもの時分に親同士で決められた相手だった。

ラウは町で一番の商家の一人息子だ。

その女将さんに私は幼い頃に入ってもらえて、婚約者となった。そのラウとは、今年結婚式を挙げる予定になっている。

結婚が決まっているのだから、既婚と同じというのが両親の主張だが、町の女の子で一度も祭りに参加したことがないのは私くらいものだ。

だから私は子どもの頃から一度もこのお祭りを他の若者と同じように楽しんだことはない。

でも、女将さんたちは優しかったし、若い子でも全員が毎年祭りに参加するわけではないので、今年は出ないという子は裏方を手伝ってくれたりする。その子たちと一緒に作業していればさみしくはなかったし、食事も出してもらえるので、皆で一緒に食べたりして、楽しいこともあった。

町の女性は、既婚者は裏方に回り、表に出ないのがしきたりだった。

女衆は、祭りの前から男衆が着る衣装を縫い、皆に振る舞う菓子や料理を前日から仕込んで、当日はひたすら配膳や片づけに追われる。

一年に一度の大切なお祭りだが、裏方は前準備も後片づけもあるのでとても大変で、ようやく祭りが終わった時にはもう疲労困憊こんぱいだった。

婚約者に関しては、あちらはまだ未婚の男が担当する担ぎ手となって祭りの表側に出ていた。

手が空いた時に時々祭りの様子を覗き見たが、音楽に合わせ踊り子たちと楽しそうに踊るラウはとても眩まぶしく見えた。

「……………いいなあ」

舞台の上で生き生きと踊る皆の姿を見て、私も衣装を着てあの場所に立つ自分の姿を想像してみたが、上手く思い浮かばない。

……………羨んでも、仕方がないことだ。

「片づけ、早く終わらせて帰ろう」

自分に言い聞かせるように独り言を呟つぶやいて、黙々と手を動かし続けた。

片づけが終わり、女衆もそれぞれ帰り支度を始めたので、私も荷物を持ってラウに声をかけてか

ら帰ろうと思ったが、演舞が終わってから酒を振る舞われた男衆は酔っぱらって大騒ぎしている。ラウもその輪の中にいて、声をかけづらい雰囲気だった。

どうしようかと悩んでいるうちに、彼らは『今日は飲み明かすぞ!』と騒がしく歩き去ってしまったので、諦めて背を向けて家に帰る道を歩き始めた。

しばらく行つてから、ふと明日は店をどうするのか訊くのを忘れていたことに気が付いた。

ラウの実家は商売をしていて、その店で私は子供の頃から働いている。

祭りが終わった明日は、通常ならいつも通り店を開けるのだが、ラウが今日飲み明かすつもりなら、休業か開店時間を遅らせるかもしれない。だから私が出勤するかどうか、確認しておこうと思つていたのに、うっかりしてしまった。

やっぱ戻つてそれだけ訊いてこようと思ひ直し、私は来た道に戻り始めた。

男衆が打ち上げをしているであろう酒場を探して、多分大通りにある店だろうと予想してそちらへ向かう。近道するために裏路地を抜けて大通りへ向かうと、酒場が近いのか、大声で騒ぐ男たちの声が聞こえてきた。

いくつか聞き覚えのある声があったので、ああ、この酒場で飲んでいるのかと思ひ、店の表側に足を向けた瞬間、男たちの大きな笑い声とともに私の名前が聞こえてきたので、ギクツとしてその場に踏み留まつてしまった。聞き耳を立てるつもりじゃなかったが、自分の名前が聞こえるかどうかでも聞かすにはいられない。

「ラウももうすぐ結婚かー! ディアはしっかり者だから家業は安泰だろ、なあ?」

「あー? うっせー……耳元で叫ぶな……」

ラウは随分酔っぱらっているようで、ろれつの回らない声が聞こえてくる。

「んだよ。つまんねえな。結婚前なんだからもつとはしゃげよなあ」

「てか、ディアとの結婚が嫌なんじゃねえのー？」

からかうような声は、多分ラウの友人の誰かだった。……名前はなんだったか、思い出せない。ただ、もともと私はラウの友人たちにあまり良く思われていなかったし、話題が自分のことだったので、ますます出て行きにくくなってしまった。

「うっせーうっせー。ガキの頃から決まっていた結婚にそんなにはしゃげるかよ。結婚式なんか、義務だ義務。あんな催し^{もよお}めんどくせえだけだ」

「うわ、ひでえ。あんなに働きの嫁さん捕まえておいて、その言いぐさ！ まーでも店のための結婚だもんなー。義務みたいなもんか」

「それにあの『ディア』だろ？ 俺アイツの笑ったことねーもん。仕事はできるかもしれないけど、あんな冷たそうな女と一生を共にするなんてごめんだわ」

酷い言われようだったが、こういう悪口には慣れてる。

仲良くもない人に言われても今更傷つかない……と自分に言い聞かせていたが、ラウの言葉を聞いて凍り付いた。

「ディアはさあ……俺を差し置いて店を仕切ってるしよ……妻ってか、母親がもう一人いるみたいで可愛げねーんだよな。仕事の話しかしねえし。俺、アイツのつまらなそうな顔を一生眺めて暮らすのかと思うと、本当に嫌になるわ……」

お前飲みすぎだろーとラウの発言を窺^{たじな}める声も聞こえたが、私は聞いてしまったラウの本音に

打ちのめされて、呼吸すら忘れて立ち尽くしていた。

「結婚前から母親みたいってそれはキツイな」

「俺、母親とはヤレねーわ。ご愁傷様だなーラウ」

友人たちの下品な笑い声が耳に響いて、ようやく我に返った私は踵きびすを返してその場から逃げ出した。ラウの言葉が頭から離れない。

酔っぱらっていたせいだと思ひ込みたかったが、きつとあれは酔っていたからこそ出た本音だ。うっかり聞いてしまった自分の不注意さに嫌気が差す。

どこをどう走ってきたのか、自分でも分からないが、気づけば私は家の前に戻ってきていた。

家にはまだ灯りがともっていて、両親や妹が収穫祭の余韻を楽しんでいるのかもしれないと思い、正面玄関から入る気になれず、裏口から入ろうと庭へ回った。

すると、馬小屋の前にある丸太の上に誰かが座っているのに気付き、ギクリとして足を止める。

「んあ？ 誰だ……あれ、お嬢さんすか？ なんでこんなところに……」

人が来た気配に気づいたのか、こちらに目を向けてきた。その顔を見て、彼が我が家の厩番うまわばんを務めている男だと分かった。

ひとりで酒盛りでもしていたのか、酒の瓶を片手にだらしなく座っている。

無精ぶしょうひげを生やしたこの男は、元傭兵という触れ込みで我が家の警備として父が雇ったのだが、この穏やかな町ではそれほど荒事あらしがあるわけでもなく、警備だけでは給金もつたいないということで、いつの間にか厩番の仕事もするようになっていた。



特に仕事熱心でもなく、むしろ昼寝をしているところをよく見かける。なぜこんなのを雇っているのかと思うが、どうやら庭木の手入れや御者おやしろまで頼まれればしているらしく、怠け者だがつぶしがきくらしい。

うさんくさいこの男と、直接会話をするのはそういえば初めてだ。給仕のマーサが『あの男は傭兵時代に拷問を受けたせいだ、男じゃなくなつたらしい』とんでもない噂話をしてた。どういう意味か分からなくて首をかしげる私に、男性機能を失つてしまったという意味だと説明されて恥ずかしかったことを思い出し、なんとなく気まずい気持ちになる。

「ちよ、ちよつと裏口から入ろうと思つただけです。そこ通してくれますか？」

「はあ……なんでもいいんですけど、家に入る前に顔拭いたほうがいいですよ。ヒデエ顔」
男はそう言つて腰に下げていた手ぬぐいを顔に押し付けてきた。

「や、ちよつと……これ臭い……」

手ぬぐいは汚いだけでなく、なんだか臭い。

一体何を拭いた手ぬぐいなのかと、そんなものを顔に付けられたことに抗議しようとしたが、ふと濡れた感触がして、私はようやく自分の顔が涙でびしょびしょだったことに気が付いた。

「あ………あれ？ 気づかなかつた……あ、ありがとうございます」

泣いていることに気づかないほど、私はシヨックだったらしい。

親の決めた結婚だし、結婚式が近づくにつれてラウが浮かない顔をしているのも分かつていた。でもラウとは幼い頃からの付き合いで、二人で過ごした楽しい時間もたくさんあった。だから、あれほどまでに厭いとわれているとは思つていなかった。

つまらなそうな顔。

先ほどのラウの言葉を思い出すと、また涙が溢れてくる。

厩番は涙が止まらない私を見て、髭をじよりとさすりながら困ったように唸っていた。

結局、厩番は何も言わず泣いている私を隠すように目の前に立ってくれていた。そしてもう一度その汚れた手ぬぐいで顔を拭かれそうになったので、丁重にお断りして自分のハンカチを取り出して涙を拭いた。

「……すみません、泣いたりして」

「いや、俺は別に……その、目え早く冷やさないと明日腫れちまいますよ」

気まずそうに助言してくれる彼は、泣いていた理由を聞いてこなかった。単に聞くと面倒なことになりそうだとかそういう理由だとしても、泣き止むまで付き合ってくれるような人だから、気を遣って訊かずにいてくれたのかもしれないと思った。

もう一度お礼を言ってお家に入ろうとすると、厩番はわざわざ扉を開けてくれた。

「嫌なことがあった時は、酒飲んで寝ちまうのが一番ですよ。じゃ、おやすみなさい」

そんなことを言い置いて、厩番はさっさと扉を閉めてしまう。

「お酒飲んで寝るって言ったって……お酒なんか飲めないわ……」

言葉を向けた相手はもう扉の向こうだ。誰もいない裏口の廊下で、私はしばし佇む。

もう頬を伝っていた涙は乾いていた。

私は居間にいる家族に気づかれないよう、そっと自室へと向かう。だが、足音を立てないように廊下を歩いていたのに、後ろから声がかかけられ呼び止められてしまった。

「あれっ？ お姉ちゃん、いつのまに帰って来たの？」

「レーラ……ちよつと服が汚れていたから、裏口から入ったの。あ……今日は踊り子お疲れ様。とても上手だったわよ」

声をかけてきたのは妹のレーラだった。まだ祭りの衣装を着たままで、少しお酒も飲んでいるのか、顔がほんのりと赤くなっている。

「えへへ、ありがと。お姉ちゃんが衣装可愛く作ってくれたおかげだよ。ねえ、いまもらったお菓子食べてるんだけど、お姉ちゃんも一緒に食べようよ。なんかいっぱいもらっちゃったのー」

「あ、ううん。さつき夜食が振る舞われてたくさん食べてきちゃったからお腹いっぱいなの。ごめんね、もう疲れたから寝ちゃうわ」

そっかー、とレーラは言つて、くると衣装の裾をひるがえ翻して居間へと戻つて行く。

その後ろ姿を、私は羨望の眼差まなざしで見送った。



第二話 『家族の定義』



妹のレーラと私は半分しか血が繋がっていない。

半分はつながっているはずなのに、見た目も性格も全く似ていない姉妹ね、とあらゆる人に耳にタコができそうなほど言われて育った。

両親の愛情を一身に受けて、天使のように可愛く育った妹。私はいつもこの天真爛漫な妹が羨ま

しかった。

継母は、父と結婚した当初は幼い私をとてもかわいがってくれた。私も優しくしてくれる新しい母にとても懐いていた記憶があるが、いつの頃からか私と継母は上手くいかなくなってしまった。

その原因のひとつはやはりレーラが生まれたことだと思う。

みんなに祝福されて生まれた妹は赤子の時からとても可愛らしく、両親の関心は全てレーラに向かっていた。

私はその頃、幼いながらも自分の立場というものを理解していて、前妻の子である私は両親にとつて扱いにくい存在であると、なんとなく分かってしまった。

だから寂しいからと言って我儘わがままを言ったりしなかったし、できるだけ継母の役に立とうと努力していたつもりだった。

だが、その頃ちようど父の仕事が上手くいっておらず、イライラした父が母に八つ当たりをするのをよく目にした。赤ん坊だったレーラも、この時期よく夜泣きをして、家の中は常にギスギスした雰囲気だった記憶しかない。

ある時、居間のソファで母がレーラを抱っこしたまま寝入ってしまった。

それを見た私は、疲れた様子ようすの母になにかしてあげたいと思って、寝ている二人にそっとブランケットをかけてあげた。

ところが、ブランケットをかけた時に腕が当たったのか、寝ていたレーラが起きて泣き出してしまったのだ。寝ていた母も驚いたように目を覚まし、火のついたように泣くレーラと、慌てる私を見ていきなり私の頬を引っぱらいた。

「ようやく寝かしつけたところだったのに！　なんで起こすのよ！　アンタはホント余計なことばかりしてっ！　嫌がらせのつもりなの！」

「ち、違うつ、ごめんなさい。起こすつもりじゃなくて……」

大騒ぎしている声が聞こえたのか、書斎から父が顔をしかめながら現れた。

「うるさいぞ！　なにを騒いでいる！　レーラが泣いているじゃないか！　泣き止ませろ！」

「ディアがレーラを起こして泣かせたのよ！　せっかく寝付いたところだったのに！」

母の言葉を受けた父は、無言のまま私を平手で張り飛ばす。

ぶたれてもう一度、ごめんなさいと謝ると、父は溜飲りゅういんが下がったのか私から目を逸そらし母が抱くレーラを代わりに抱っこしてあやし始めた。

父に抱っこされたレーラはすぐに泣きやみ、キヤッキヤと笑ったので、父と母はその様子を見て二人ともほっとしたように笑顔になっていた。

頬をさすり俯うつむく私には目もくれない。

それが少しだけ悲しくて、張られた頬をぎゅつと押さえる。でも、いつもギスギスしていた父と母がひさしぶりに笑顔で見られたので、それにホツとして悲しい気持ちも少しだけ薄れていった。

両親が笑顔になってくれるなら、ちょっと痛いくらいなんてことない。そう思うようにして、笑顔の三人を眺めていた。



この出来事をきっかけに、家族の雰囲気は変わっていった。

父と母はあまりケンカをしなくなり、いつも辛そうだった母はよく笑うようになっていた。レーラもだんだん夜泣きをしなくなり、どんどん可愛く育つていく姿を見て、両親はいつも嬉しそうに二人でレーラを構って、幸せそうに微笑みあう時間が増えていく。

それに比例するように、父や母の私に対する風当たりは強くなっていった。

たとえばカトラリーの使い方ひとつでも、少しでも間違うと手のはれ上がるまでぶたれる。レーラが悪戯して壁を汚してしまった時なども、ちゃんと妹を見ていなかったと言われ、お仕置きとして外に締め出されたりもした。

特に父がイライラしている時など、歩く音がうるさいと些細なことで怒鳴られる。だから怒らせないように必死に言われたことを頑張つて、いい子でいようとしたが、どれだけ努力しようとも、私が怒られる回数は減らなかった。

私が怒られお仕置きをされるほど、父と母の仲は良くなつていくようだった。

レーラが大きくなるにつれ、それは顕著になり、レーラがなにか悪いことをしてしまった時や粗相をした時は、父と母はレーラに対する怒りを私へと向けた。

父の事業は上向いてきたといってもまだまだ軌道に乗ったとは言いがたく、仕事のことではイライラしていることもあった。

母も、レーラの夜泣きが減って少し楽になったといっても、ちょっとしたこと泣き止まなくなったりして、疲れた顔をしているときも多かった。

そういう時は決まって、私は細かいことで激しく叱責しつせきされきつい仕置きを受けるはめになる。

イライラした気持ちややり場のない怒りとかをぶつける相手が、家族の中でいつのまにか私の役割になっていたのだ。

父も母も、怒鳴ったり叩いたり、怒りをひとしきり私にぶつけると気持ちが悪く落ちつくようで、お互いやレーラには感情的にならずに笑顔で接することができるらしい。

そうやって私の家族は平和で明るくて、ケンカなどない幸せな家庭になっていった。

私を除いて、父と母とレーラは理想的な完璧な家族に見えた。家族の平和が保たれるように、怒りや不満といった良くない感情は私にぶつけ、処理する。そうすることで皆笑顔でいられる。

色々な不都合のはけ口となることが、家の中における私の役割であり、私の立ち位置なのだと、幼いころに漠然と理解した。



集団の中で誰かひとり憎まれ役がいると、その他の人々は団結し仲よくなれるのだと、悲しいことに私は自分の家族から学んだ。

貶おとしめていい存在。

痛めつけていい存在。

蔑^{さげす}んでいい存在。

そういう者をひとり作ることで、集団の絆は深まり、争いごとの無い関係を築きやすくなる。

決してそれが家族の正しい姿ではないのだろうが、私の家はそうやって私を憎まれ役にすること
でしか均衡を保てなかったのだと、今では理解している。

たとえいびつな形でも、家族に私は必要とされているのだと思うようにして、辛い気持ちには蓋
をした。いや、そうするしかなかった。

頑張っていたら、いつか家族が私を認めてくれるかもしれない。私がどれだけ家族の役に立つか
を理解して、もっと必要としてくれるかもしれない。

そう、たとえ感情のゴミ捨て場なのだとしても、私は家族にとってなくてはならない存在のはず
なのだと思うようにして自分を慰めた。家族に認められたいという欲求をひたすら追い求めるよう
に、私は勉強も家の仕事も必死に頑張った。

でも、その努力も多分無駄だったんだろう。

両親は私を見ると、悪いところを探して文句を言うことしかしないし、成長した今では、妹の
レーラがどれだけ私と違って素晴らしいかを比較するためだけの存在でしかないようだった。

チリチリと嫉妬が胸を焦がす。

レーラは可愛がられて育った分、努力というものを知らない。

勉強も苦手なので、よく私が代わりに学校の課題などをやらされた。

今日の祭りの衣装も、本当は自分が着るものは女衆の修業の一環として自分で縫わなくてはなら
ないのに、苦手だからという理由だけで私が全て作ることになった。

……私自身は祭りに娘として参加させてもらえたことなどないのに。

レーラが美しい踊り子姿で楽しんでる姿を目の当たりにすると、一度もあの衣装を身に着けることなく独身時代を終える事実が重くのしかかってきて、今まで感じないようにしていた嫉妬心が胸を焦がした。

でも、嫉妬を感じれば感じるだけ自分が辛くなるのが分かっている。

意地でも辛いなんて思わない、嫉妬で無様な姿をさらすなんて絶対にしない。そう思うことだけが、私を支える矜持きようじだった。



久しぶりに子どもの頃の夢を見てしまったせいで、寝起きは最悪だった。

昨日、立ち聞きしてしまったラウの言葉を思い出し、さらに暗澹あんたんたる気持ちになる。

目が覚めてしまったことだし、開店時間にはまだ早いがラウの店に向かう。休みなら休みで構わない。どうせ家についても用事を言いつけられるだけなのだから。

ラウの家は輸入品を扱う卸問屋おろしんやで、町では本業と別にラウのお母さんが雑貨店を営んでいる。

この町で一番大きな商店だ。

ラウのお父さんは一年のほとんどを買い付けの仕事で国内外を回っている、問屋の在庫管理や入出荷、そして雑貨店の経営を、お母さんとラウの二人で担っている。仕事があまりにも忙しいため、以前はお手伝い程度だった私も、今では完全な従業員として毎日働いている。

店につくともうラウのお母さんが店の前を掃除していた。今日は開店で間違っていないなかったようだ。やはり来て良かった。

「お義母さん、おはようございます。あの、ラウはまだ寝ていますか……?」

「あらディアちゃん! ずいふんと早いね! 昨日は大変だったんだから、もっとゆっくりでよかったのに。ラウは明け方帰ってきたからこれから寝るとこよ。いやあね、あの子今日は使い物にならないわ」

店先でお義母さんと話していると、声が聞こえたのかラウが顔をのぞかせた。二日酔いなのか、頭を押さえて具合が悪そうな表情をしている。寝起きというより、飲み明かして今帰ってきたところのようだ。

「あーだりい。あ? なんだよディア。こんな朝早くから、店手伝いに来たのか?」

「うん……あの、ちょっと話いい? ねえ、結婚式のことなんだけど……本当にこのまま進めても、平気? もし嫌なことがあるなら……」

昨日のラウの発言を立ち聞きしていたとは言えず、遠まわしにこの結婚を後悔していないかと聞いてみた。

「は? 細かい段取りは全部お前に任せてあるだろ。俺はそういうのよくわかんねーから、ディアの好きなようにすればいいだろ」

「いや、そうじゃなくって……あの、私でいいのかなって……」

ラウは特に変わった様子もなく、私と話をしている。でも、今更言いだせないだけで本当は私と話をするのも厭わしいのだろうか。

「つまらなそうな顔」

昨日聞いてしまった言葉がまた蘇って、胸がズキンと痛む。ラウはそんな私を訝しげに見ているが、お義母さんがそんな彼を引っぱりたい。

「もう！ またそんな言い方して！ 今からそんなじゃディアちゃんに愛想つかされちゃうわよ。こんないいお嫁さん、ほかにいないんだから、大事にしなきゃだめよ」

パシパシとラウは背中を叩かれて、鬱陶しそうにしていた。

「ちよ、二日酔いなんだからやめてくれよ。俺たちは長い付き合いなんだから、変に気を遣う関係じゃねーの。これでいーんだよ。な、ディア」

「あ……うん」

このままでいいのだろうか。ラウはこれでいいのだろうか。昨日の言葉は本心じゃないってことなのだろうか。

私の表情が晴れないのが気になったのか、珍しくラウは優しい言葉をかけてきた。

「結婚式……主役は花嫁なんだからさ、ディアがしたいようにすればいいだろ？ よくわかんないけどさ、女にとっては一生に一度の大事な晴れ舞台だっていうから、お前が納得いくように決めていいよ。心配しなくても、あとから文句なんか言わねーから」

こんな気遣うようなことを言われたのが久しぶりだったので、感動してしまった私は素直に頷いて、たくさんの言いたかった言葉を飲み込んだ。

……きつとこれでいいんだ。

昨日はきつと男同士で飲んで、愚痴を言ってみただけだったんだ。この結婚を望んでくれたお

義母さんのためにも、昨日のことを下手に掘り返してギクシヤクしないほうがいい。

じゃあ寝るわ、と言うラウを見送って、モヤモヤする気持ちを振り切るように、私はいつもより張り切ってお義母さんと一緒に開店の準備をする。

お義母さんは仕事には厳しいが、親切で優しい人だ。人として尊敬している。

もとはと言えば、このラウのお母さんを助けたのがきっかけで、私はラウの婚約者になったのだ。

お義母さんとの出会いは、町中で貧血を起こしていた彼女を助けたのがきっかけだった。

助けたといっても、まだ幼かった私はただお義母さんの家の場所を聞いて人を呼びに行っただけなのだが、たったそれだけのことをすごく感謝してもらえて、わざわざ私の自宅にまでお礼を言いに来てくれたのだ。

この時は珍しく両親に褒められたのを覚えている。

この出会いをきっかけに、我が家とラウの家との交流が始まり、時々私がお店でお小遣いかせぎに働かせてもらったりするうちに、婚約話が持ち上がったのだ。

父は私がお嫁に行けばあちらとの商売のつながりも深くなるし、店の規模からいって我が家には利益しかない話なので、二つ返事で了承していた。

婚約の話には驚いたが、嫌ではなかった。働き者だからと言われ、自分の価値を認めてもらえたようでとても嬉しかった。

ラウとはお互い恋愛感情など持っていなかったが、向こうも特に否いなやはないらしく、私たちの婚約はすんなりと調とのった。

ラウはこの頃、まだ結婚というものについてあまり深く考えていなかったのだろう。

それまで普通に仲良くしていたのに、友人たちが女の子と付き合ったりする年頃になると、ラウは急激に私に余所余所しくなった。

恋愛もせず、親の決めた相手と結婚して一生を共に過ごさねばならないことの重大さに、成長するとともに気づいてしまって、今更ながら不満に思うようになったらしい。

それでも彼はこの結婚を止めるとは言いださなかった。いや、言いだせない状況になっていたというのが正しいだろう。

なぜなら、私は店で重要な働き手になっていたからだ。

長く働くうちに、経理や仕入れ管理まで担当するようになっていて、私が抜ければお義母さんとラウだけでは店は回らなくなるくらい多くの業務を担っていた。

それに、いずれ嫁になると決まったからか、給金ももらっていないなかった。

今更この結婚を止めるには問題があり過ぎるところまで来ていたので。

多分そのことをお義母さんに言われていたのだろう。ラウは不満そうな顔は見せるが、決定的に私を遠ざけることはなかった。

個人的な感情と、店を天秤にかけて、ラウは我慢するほうを選んだ。

この結婚は二人だけの問題ではない。今更止めたらくさんの人にも迷惑をかける。

……だから、これでいいんだ。

ラウの言った言葉は、聞かなかったことにするのが一番いいんだ。

そう思って、自分を納得させ、ラウの不满にも自分の胸の痛みにも全て気づかない振りをして、

式の予定日が近づくなか、私は淡々と結婚の準備を進めた。



——そして迎えた結婚式当日。

この日ばかりは私が主役のはずなのだが、朝早くから会場の準備に駆けまわっていた。

教会の隣にある広場で、結婚の宣誓が終わった後にささやかな祝賀会を開くのが習わしとなっている。

本来は、家同士が決めた結婚の場合は、両家の親が場所を用意して人々を招くものなのだが、私の両親は私のために動いてはくれないので、お義母さんだけに負担をかけるわけにもいかず、私が会場の準備からやらざるを得なかった。

招待客の確認と受付の準備が終わると、私も自分の準備に取り掛からねばならない時間になっていた。

急いで控え室へと向かい、この日のために準備した婚礼衣装に着替えなければいけない。

忙しくてラウとは朝からほとんど会話もできなかったが、もう着替えを済ませているころだろう。

私も急がなくなっちゃと思いながら、控え室になっている部屋のドアを開こうとした時、隣の衣装部屋のドアの向こう側から、男女のうわずった声が聞こえてきて、心臓が凍りつく。

「あつ、ラ、ラウッ！ 好きっ！ ラウ好きなのっ……」

「ああ、レーラ！ 俺だって！ レーラ、レーラッ！」

聞こえてきた声に、体が凍り付いて動くことができない。

……………嘘でしょう？

事実を認めたくなくて、思考が停止しそうになるが、聞こえてくる声を耳から遮断することはできない。ドアの向こうで女性と睦みあっているのは……これから結婚する相手であるラウだ。

そして、信じたくないが、その相手は私の妹のレーラだ。

ドアノブにかけた手がブルブルと震えて力が入らない。呆然として、動くこともできず棒立ちになっていると、後ろから明るい声がかけてられて文字通り飛び上がってしまった。

「あらあら！ デイアちゃんまだそんなカッコして！ 突っ立ってないで、早く着替えないとなにやってるのー」

私を探しに来たのか、いつの間にか真後ろに居たお義母さんが止める暇もなく衣装部屋のドアを開けてしまう。

「ホラ早く支度しなきゃ！ 招待客の皆さんも……………ひっ、きゃあああああ！」

ノックもなく開けられた扉の向こうには、私の婚礼衣装を羽織った半裸のレーラと、ズボンをずり下ろしてみつともなくお尻を晒したラウの姿があった。

お義母さんの絶叫でこちらに気付いた二人は、抱き合った体勢のまま目を丸くしている。

疑いようもなく、明らかに情事の真っ最中だ。

「ああ……………最悪だわ……………」

私は現実逃避するように手でまぶた瞼を覆った。

「なっ……………なに……………アンタたちは何をやっているの———！ この馬鹿っ！ 早く離れなさい！

「何考えてるのよ！」

我に返ったお義母さんが、聞いたこともないような怒声をあげた。

それからのことは悪夢としか言いようがない。

お義母さんの叫び声でたくさん人が集まってきてしまつて、身を隠す暇もなく二人のあられもない姿を皆に見られてしまい、招待客の人々にも状況を知られてしまった。

控室は、中腰でズボンを穿こうとオタオタとしているラウを捕まえてパシパシと殴るお義母さんと、半裸を皆に見られて泣き叫ぶレーラとで大混乱に陥っている。

ラウを殴っていたお義母さんが、婚礼衣装を羽織ったまま震えているレーラに目をやり、腕をつかんで引き起こした。

「アンタも！ 姉の結婚式でなんてことしているの！」

頬を張ろうと手を振り上げた瞬間、レーラがとんでもない言葉を叫んだ。

「乱暴しないで！ 私、妊娠してるんだからあつ！ お腹にラウの赤ちゃんがいるのっ！」

レーラが投下した爆弾発言のせいで、もう完全に結婚式どころではなくなつてしまった。

泣き叫ぶレーラと、怒り狂うお義母さん。ラウのお父さんは騒ぎをきいて駆け付けてから、ずっとラウを殴り続けている。

私の両親はおろおろとしながらレーラをなだめている。

主催者側で動こうとする者がいなかったの、しかたなく私は、もう集まってきてくれた招待客の人々に結婚式は中止になったと頭を下げて回る。

教会の司祭様にも事情を伝え、準備をして待っていてくださったのにこんなことになってしまつて申し訳ないと、ただ謝ることしかできなかった。

司祭様は、多くを訊ねなかつたが、私を慰めるようにそつと背中を撫でてくれた。

帰って行く招待客は皆、大体の事情を察しているのか気まずそうに会場を出て行く。友人たちは物問いたげにしていたが、私が無表情のまま頭を下げているのを見ると、結局何言わずに帰って行つた。皆の痛ましそうな目が辛くて、私は顔を上げることができなかった。

からつぽになつた会場で、独りで片づけに取り掛かる。誰かに手伝ってもらえばよかつたのかもしれないが、あまりにもみじめで一人になりたかつた。

今日のために準備した花や飾りが全てゴミになつていくのを見ると、どうしようもなく苦しくなつた。だが今日中にこの場所を片づけなくてははいけない。今は何も考えないようにして、私は黙々と作業をした。

片づけが終わつてもまだラウたちは姿を見せない。

まだ控え室にいるのかと思つてそちらに向かうと、そこにはもう誰もいなかった。

会場にある部屋を全て回つて探したが、私の両親も、ラウの両親も、ラウもレーラもいなかった。「……帰つちやつた、のかな」

私が片づけをしているうちに、彼らもすでに帰つてしまつたようだった。誰も私のことを気に留めなかつたのだろう。

衣装部屋には、私が着るはずだった婚礼衣装がぐちゃぐちゃに踏み荒らされた状態で、床に広がつていた。

花嫁が着る婚礼衣装は、花嫁が全て仕立てて、友人やお世話になった人たちにも一刺しずつ刺してもらって皆の祝福をもらう風習がある。縁のある人に、一刺し、一刺し気持ちを込めてもらうのだ。

いろんな人の許へ衣装を持って回るたび、『おめでとう』や『幸せに』と祝福の言葉をもたらたのに、その気持ちのこもった婚礼衣装はもう着られない。

よりによって、レーラはそれを羽織ってラウと抱き合っていた。

ラウとレーラはいつからあんな関係になっていたのだろう。あんな真似をして結婚式をぶち壊すくらいなら、もっと早く言ってくればよかったのに。

汚れて踏みつけられた婚礼衣装は、まるで今の私の気持ちを表しているようだった。



第三話 『地獄と孤独』



家から乗って来た馬車は見当たらなかったので、仕方なく歩いて家に帰る。

……これからどうなるのだろう。

恐怖にも似た不安が押し寄せてきて、家に帰るのが辛かった。

家に帰ると馬車が二台停まっているのが目に入る。ラウの両親も私の家に来ているのだろう。

ドアを開けると、父と母の媚びるような高い声が聞こえてきて、ああ、なにか話し合いの決着が付いているのだと察しが付いた。

物音で私が帰ってきたことに気付いた父が、廊下に飛び出してきて、すかさず怒鳴りつけてくる。「ディア！ お前はこんな大変な時にどこをフラフラほつき歩いてたんだ！ 早く客間へ来い、お前にも話がある」

どこって、会場にずっといたのだがと心の中で思ったが、口答えすると殴られるので黙ったまま父の後ろについて客間へと向かう。

客間には来客用の大きいソファにお義母さんだけが座っていて、少し離れた小さいソファにはラウがレーラと肩を寄せ合って並んで座っていた。

部屋を見回すが、ラウの父親の姿が見当たらない。

ソファ席でお義母さんが主体となって話し合いをしているところを見ると、父親はこの場にきていないようだ。

義父となる人とはあまり接点がなかったが、店のことや倉庫の管理など全部お義母さんに任せきりで、自分は買い付けと称して一年のほとんど家を留守にしていた。それなのに、たまに帰ってきた時は卸業おしきょうと店の帳簿を出させて、売り上げや経費についてしつこいくらい問い詰めてくるので、正直好きにはなれなかった。

普段お義母さんに任せきりなのに、文句だけを言うなんて無責任な人だなという印象だった。

確か結婚式の会場にはいたはずなのに、この場にはいないということ……息子のために格下の者に頭を下げることになるのが嫌で妻に押し付けて逃げたのかもしれない。

ラウとはあまり関係がよくなかったし、久しぶりに帰宅してもラウとは会話もないような状態だったから、そんな息子のために下げる頭はないと言いそうだななどとぼんやり考えていた。

ちらりとラウを見ると、こちらを見なくせにキヨロキヨロ目線を彷徨さまよわせていて、こちらも逃げられるものなら逃げたいと思っていそうな顔をしていた。

静まり返る居間で、父が演説でもするように話し始めた。

「ディア、レーラはお前に遠慮してずっと言いだせなかつたらしいが、以前からラウ君のことが好きだったんだそうだ。でも、ラウ君は家の都合でディアと婚約をしていたし、式の準備も進んでしまっている。ずつと気持ちを秘めて悩んでいたと言っていた。我が家としても良い縁だと思って、ディアをラウ君の婚約者にしてしまったが、家の都合だけで好き合っていない同士を結婚させるなんてやはりすべきではなかつたのかもしれない。それは父さんの過ちだ」

父は悲しげに首を振りながら、妙に芝居がかつた様子で大仰おおきょうに両腕を広げて喋っている。子どもができるような関係になつていたので、全然気持ちを秘めてなどいないだろうと思つたが、口には出せない。

「結婚は、やはり愛し合う二人が誓い合つてするものだ。結婚前に大切な娘を傷物にされて、正直、もろ手を挙げて大賛成というわけにはいかないが、レーラのお腹には新しい命がいる。ここはもう、レーラとラウ君の結婚を許すしかないだろう。ディアも別にラウ君と恋仲であつたわけでもないのだから、構わないだろう？ 縁がなかつたと思つて、結婚は諦めなさい」

にっこり微笑みかけているつもりなのか、歪ゆがんだ笑みを浮かべる父に吐き気を覚える。

……ああ、結局そういうことか。

既に冷え切つて凍り付いていた心が、私の中で音を立てて崩れていった。

両親は絶対レーラを優先すると思つていたが、こんな風に裏切られた私を、父は少しも慮おもんばかつ

てくれなかった。でも、ラウのほうは、お義母さんはそれでいいと了承したのだろうか。一縷いちるの望みをかけてお義母さんを見るが、目が合うとあからさまに逸よらされてしまった。

それで、分かってしまった。

ラウの両親は、ラウとレーラを結婚させることを許したのだ。お義母さんは、従業員にも私にもいつも公平に接してくれて、筋が通らないことは決してしない人だった。だからこんな理不尽な話をそのまま受け入れるとは思っていなかった。

でもこの人は、問題解決のための方法として、うちの両親と同じようにすべての不都合を私に押し付け、切り捨てることを選んだのだ。

お義母さんに見捨てられたと分かった瞬間が、これまでのどの仕打ちよりも堪こたえた。息子の婚約者という立場以上に、店の従業員として私とお義母さんは協力し合って信頼関係が築けていたつもりでいたし、この場において私を擁護してくれる人がいるとしたら、お義母さんだけだと思っていた。それはただの幻想だったのだと分かって、打ちのめされてしまった。

「……じゃあ、私は用済み、ということですか」

絶望的な言葉を呟くと、とりなすようなお義母さんの声が聞こえてくる。

「ディアちゃん！ ラウのことは……本当にごめんなさいね、ディアちゃんに対してあまりにも不誠実だけれど、レーラさんを妊娠させておいて、男として責任をとらないわけにはいかないから……二人を結婚させるしかないの。お願い……分かって頂戴。でもディアちゃんが用済みなんてそんなことないわ！ ディアちゃんはウチの店に欠かせない大切な人なのよ！」

大切、だなんて甘い言葉も、残酷な現実の前には何の意味も成さない。黙っていると、お義母さ

んはひとつ提案なんだけど勝手に話を続けた。

「だからね……ディアちゃんさえ良ければ、正式にウチの店で働いて欲しいの……。あっ！もちろん経営側の人間としてね、お詫びも兼ねてあなたに利があるように取り計らうから安心して。まあでもいきなりそんなことを言われても、まだ気持ちの整理がつかないでしょうから、落ち着いたらまた話し合いますよ？ 仕事はそれまで休んでいいから。ね？」

一瞬何を言われているのか理解できなかった。

それは、ラウとレーラが夫婦になつて継いだ店で、従業員として働くということだろうか？

結婚式に浮気をされて破談となつた私が、元婚約者と浮気相手の妹の下で、働く？

一体なんの冗談だ。

その提案を受けて、私が喜ぶとも思つたのだろうか？ なんの蟠わたがまりも無く働けると思つていたのか？ どんな気持ちでその提案をしてきたのか、本当に理解ができない。

あまりにも心無い提案に絶句していると、イライラしたように父が口を挟んでくる。

「おい、なにを黙っているんだ。せっかくあちらのご両親がお前の今後について考えてくださったんだ。お前も、本来なら将来が約束されていたのに、いきなり仕事を失うのは辛いだろうからな。ちようどいいじゃないか、レーラもお前を追い出すような真似はできないと言うし、赤ん坊が生まれれば手伝いが必要になるのだから、姉のお前がそばに居れば助かるだろう」

いい考えだといわんばかりの父。それに追従するように、母も私にいつもは見せない媚びたような笑顔を向けてくる。

「いいいわね、ディアはやっぱり結婚とか向いてないと思うのよ。職業婦人として生きていくほう

が性に合っているんじゃない？　ねえ、レーラのお腹が大きくなる前に式をあげなくちゃいけないから、急がなきゃいけないし、あなたが助けてあげなさいよ。婚礼衣装も、一度縫っているから手順がわかるし簡単でしょう？　妊婦に負担をかけられないんだから、あなたができるだけ作ってあげなさい」

踏みつけられ、ぐちゃぐちゃになっていた私の婚礼衣装。

祝いの模様を刺繍するのにとでも時間がかかって、寝る間を惜しんで作ったのに、一度も袖を通すことなくゴミになってしまった。

その私に、レーラの婚礼衣装を作れと言う。

本気で言っているのか？　そんなことを言われて私がどう思うか分からないのだろうか？

ぐるりとこの場にいる人々をゆっくり見回すが、誰もこの提案が間違っているとは思っていないようで、特に反論の声は聞こえてこない。

誰かひとりでもいい。それはおかしいんじゃないかと一言言ってほしい。ほんの少しでいいから、私を氣遣うそぶりを見せてほしい。

わずかな期待を込めて全員を見るが、声を上げてくれる人はひとりもいなかった。

……私のことを気にかける人は、ここには誰もいないんだ。

それを思い知らされて、それまで持ちこたえていた気持ちの糸がプツリと千切れてしまった。

「……お断り、します。私には無理です。なにもかも、無理です」

それだけ言って、背を向けて部屋を出た。

後ろから父の怒鳴る声が追いかけてきたが、ラウのお義母さんがなだめる声が聞こえたので、そ

のまま私は自室に駆け戻った。

そうして扉の前に本棚を倒して誰も入って来られないようにして、ベッドに突っ伏した。

悔しさと惨めさでやり切れず、頭をベッドに打ち付ける。

どうしてあんな残酷な提案ができるのだろう。どうして誰も、私が傷ついていると思ってくれないんだろう。どうして……どうして……。

自問自答する私に、もう一人の自分が嘲りながら答える。

—— どうしてって？ そんなこと分かり切っている。答えは簡単。私が彼らにとって大切な人間じゃないからだ。

大切じゃない、どうでもいい存在の人間が、傷つこうと悲しもうと、それこそ彼らにとってはどうでもいいことだ。

私は……家族に愛されていないのがわかっていたから、だからこそ誰かにとって少しでも必要とされる人間になりたくて、色々なことを我慢して、耐えて、努力し続けてきたつもりだった。

でもそんなのはただの自己満足で、彼らには少しも届いていなかった。

なんの意味も無かった。彼らにとつて私は気に掛ける価値もない人間だった。

「私は彼らに、少しも大切に思われていなかったんだ」

便利で使い勝手がいいだけの存在だった。気づきたくなかった、そんなこと。

「私、なんで生きてるんだろ……」

たとえ今、私が死んだとしても、誰も悲しまないし惜しんでもくれない。形式的に葬式をおこなって、儀礼的に弔って、それで終わり。

そのうち私という人間が存在したことも忘れてしまう。彼らは私がどんな気持ちでいたのかも、どれだけ悲しんだかも少しも知らずに幸せに暮らすんだらう。そして思い出しもしないんだ。

私は頭をぐちゃぐちゃにかきむしって、何度も何度もベッドに頭を打ち付けた。

心の中に黒い気持ちがあくあくと湧き上がってくる。

暴力的な衝動が腹の底から溢れ出る。

—— なにもかも滅茶苦茶にしてしまいたい。

ずっと私を虐げ続けてきた家族も、給金の要らない使用人として使い捨てたラウのお母さんも、私を切り捨てて妹と幸せになろうとしているラウも、一番私が傷つく方法で結婚式をぶち壊した妹も、なにもかも、全てめちゃくちゃに壊してしまいたい。

私の居場所でなかったこの家も、私の大切な人になつてくれなかったラウとラウの家族も、みんな全部消えてなくなればいい。

なにもかも消えてしまえ、二度と私の瞳に映らないように、消えてしまえ、消えてしまえ、消えてしまえ………。

真つ暗になった部屋の中で、私はふらりと立ち上がって、窓から外へ出た。

いつの間にか真夜中になっていて、屋敷の灯りも落ちていた。両親もとうに床についているようで、辺りはしんと静まり返っていた。

闇色に染まる我が家を仰ぎ見て、思う。

生まれた時からずっと過ごしている我が家を見ても、楽しかった思い出が何も浮かんでこない。

その事実自嘲的な笑いがこみ上げる。

傷つけられ厭われ蔑まれた記憶がまったこの家を消し去ってしまったえば、この苦しい気持ちも少しは楽になるのだろうか。

「……こんな家、燃やしてしまおう」

考えるより先に、するりと言葉が口から零れ落ちた。

そうだ、どうしてもっと早くそうしなかったのか。もっと早く燃やしておけばこんなにも傷つかずにすんだのに。

そうしよう！　きれいさっぱり燃やして消してしまおう！

そうと決めてしまえば気分がすごく高揚して、急に気持ちが高揚した。黒い感情に突き動かされるように、私は家の裏口へと向かう。

「なあんだ、こんな簡単なことだったんだわ。なんかも燃やして、全て消してしまえばよかったんだ。そうすればきつとすつきりする！　ああ！　なんで今まで思いつかなかったのかしら！」

沸き上がった激情で体がウズウズする。早くしなくちゃと気が急いでじっとしてられない。

異様な高揚感に頭がしびれて、今自分が何をしようとしているのか理解しないまま、操られるように私は走り出した。

勢いよく飛び出した次の瞬間、なにかに体当たりして、その反動で転んでしまった。

「きゃあ！」

「いてっ！　あ、すんませ……ってぎゃあああ！　お、おばけ————！」

ぶつかつた相手が一瞬誰だか分からず、目を凝らしてそちらを見ると、目があつたとたんに相手が叫び出した。

「ヒエエ〜！」

気持ちの悪い叫び声をあげて後ろに転がったのは、先日会った厩番だった。

こんな夜中に人に会うとは思わなかったから、私もびびくりしたが、男は私をおばけと見間違えたらしい。いい大人がみつともなく悲鳴を上げている姿は驚くほど滑稽こっけいだったので、ポカンとして何も言葉が出てこなかった。

この男、本来は警備で雇われたのではなかっただろうか。おばけと私を見間違えて怯おびえるなんてどう考えても役立たずなのだが。

「ひいやああ……つて、あれ？ ん？ お嬢さん？ こんな真夜中になにしてんですか。うわ〜もうびびくりしたあ」

「なにつて……あなた、警備の人間が、そんな怖がりで仕事になるの……？」

「いや、いやいやいや、だつて髪ボサボサでそんな鬼のような形相してるからあ、おばけにしか見えなかったんですよ。お嬢さんこんな夜中に一体どうしたんですか……？ 毒でも飲まされて殺された死体より酷い顔してますよ？ 言っちゃアレですけどすげえブスになってますよ。いやあお嬢さんのそんなブス顔みたくなかったあ……」

「ブ、ブス……!? 普通、面と向かつてそういうこと言いますか!? こんな顔で悪かったわね！ 生まれた時からこういう顔なのよ！ だから親にも婚約者にも愛されなかったんじゃない……どうしろつていうのよ……私だつてレーラののように可愛らしく生まれたかつたわよ……つ。なんなのよくだれもかれも！ 私だつて……っ！ 私だつてえ……」

あまりの言われように、ずっと我慢していた涙が溢れてくる。ラウの浮気現場を見てしまった時

も、誰にも顧みられなかった時も泣けなかったのに、こんなタイミンで泣くなんて。

声をあげて泣く私を見て、男はまずいと思ったのか、慌てて言い訳を始める。

「あわわわ……違いますよ、そうじゃないですって、逆ですよ。いつものお嬢さん、すげえ美人でシユツとしていているから、あく目の保養だなぁって思って眺めていたんです。それが今まで見たこともないようなおっそろしい形相で髪振り乱したから、俺ショックで……あんな綺麗な顔してても、人ってこんなブスになれるんだなぁって驚いちゃっただけですよ。ほら、窓に映った自分の顔見てもみてくださいよ！ いつもと違ってすげえブスだから」

「ちよ、ちよっとブスブス言い過ぎ……」

男に窓を指し示され、つられてそちらを見ると、幽鬼のような女が月明かりに照らされてガラスに映っていた。

それが自分だと認識するのに多少の時間を要するほど、普段見慣れていた自分の顔とはかけ離れていた。ギラギラと血走った目を吊り上げて泣いている恐ろしい姿。髪はぼさぼさになっていて、鬼のような形相と相まって恐ろしいことこの上ない。

ブスどころではない、これじゃまるで化け物だ。厩番が飛び上がって驚くのも無理はない、自分だってこんな人間に夜中に遭遇したら叫び出すに違いない。

「……うわ……なにこれ……酷い顔……」

「そうでしょ？ 恨みつらみで墓場から蘇った死体みたいな顔でしょ？ 心臓止まるかと思いましたがよ。こんな真夜中にウロウロして。なんかあつたんすか？ つうか、俺……かわや厠に行くところだったんだ。あ、やべ、漏れそう。ちよ、ちよっと待っててください、すぐ戻るんで」

厩番は突然焦り出して、私を馬小屋の隣にある汚い小部屋に押し込んだ。

反論する間もなく押し込まれて扉を閉められてしまう。

部屋を見回すと、小さな炊事場と、汚いテーブル。そして木箱を連ねて作ったような簡素なベッドがあった。どうやら厩番はここで寝泊まりしているらしい。隙間風が入ってくるこんな粗末な小屋で、あの人は暮らしているのか。

どうしたらいいのかと逡巡したが、部屋に戻る気にもなれず、仕方なくベッドの端っこに腰かけて厩番の帰りを待つ。

「あゝすっきりしたあゝ。あ、お待たせお嬢さん！ ちょっとは落ち着きました？ あ、わりーね、部屋寒かったでしょ」

ほどなく厩番が戻って来たが、その手にはどこから持ってきたのか酒瓶と燻製肉の塊がある。

……ウチの台所からくすねてきたのではないだろうか。いや、他に保管場所があったと信じたい。そして男は、まだ消していなかった火壺に鍋を載せ、葡萄酒を温めはじめた。

棚の上に乱雑に置いてある瓶の中からシナモンと蜂蜜を取り出し、テーブルに転がっているオレンジの皮を剥いてぽいぽいと鍋に放り込み、なんとホットワインを作ってくれた。

テーブルに置きっぱなしになっていたカップにホットワインを入れて、私の前に差し出してくる。「ほい。まだ死人みたいな顔色してるから、少し温まったほうがいいですよ」

「あ、ありがとう……」

カップの縁は欠けているし、置きっぱなしになっていたから洗ってあったのかも分からない。でもせっかく私のために作ってくれたものだし、なんだかとても美味しそうに見えたので、私はため

らいながらも口をつけた。

「……美味しい」

既番が作ってくれたホットワインは驚くほど美味しかった。

ちよっと甘すぎるくらいなのかもしれないが、その甘さがからっぽの胃に優しく沁みて、心まで温まるようだった。

二口、三口と飲んでいると、お腹に温かいものが入ったことで、急激に空腹を感じて胃がきゅつとなった。それと同時にお腹が小さくくうと鳴る。

そういえば私は朝から今まで何も食べていなかったということに気が付いて、そつと胃のあたりを撫でていると、それを見越したかのように既番は燻製肉をナイフで切つて渡してくれた。

「ホレ、食べなあ？」

「……あ、ありがとう、いただきます」

もそもそと燻製肉を食べながらホットワインを飲む。

肉のうまみとホットワインの甘さが五臓六腑ごぞうろくぷに染みわたるようで、冷え切っていた手足にも温かさが戻ってきた。

ふと見ると、私の手のひらは爪が食い込んだあとが残っていて、血がにじんでいた。

人心地がついた頃に、酒を瓶ごと叩あおっていた既番が今日の天気でも訊くかのような気軽さで話しかけてきた。

「それで、お嬢さんはなんかあったわけ？ おいちゃんに話してみ？」

既番はニヤニヤしながら面白そうに私を見る。全然親身に話を聞こうって気はなさそうだ。

思えば私はこの時、ホットワインに残った酒精しゆせいでちよつと酔っていた。

こんなよく知りもしないうさんくさい男の部屋に上がり込んでベッドに座っているなんて、普段の私だったら有りえない迂闊うかつさだ。

だが、身近な人にことごとく裏切られた私は、赤の他人と一緒にいるほうが楽だった。

「……なんかあったなんでもんじゃないです。もう、なにもかも嫌になつて……」

「そうかい。まあ俺で良けりや聞いてやるから、すつきりするまで話したらいいですよ」

厩番は酒を飲みながら軽い調子で言う。

その軽くてどうでもよさそうな態度に気が楽になって、私は今日起きたことからポツポツと話し始めた。

一旦話し始めると、堰せきを切つたように次々言葉が溢れて止まらなくなつてしまった。

酔つた勢いで、ラウが本当は結婚を嫌がっているのを聞いてしまったことに始まり、今日結婚式でラウと妹が浮気をしていたこと、妹が妊娠していること、そして私の家族とラウの家族は二人の結婚を認めてしまつて、誰も私のことなど顧みなかったことなどを、一気に喋つた。

それを聞かされている厩番は、酒を飲んで肉を摘みみながら、『へー』とか『あららー』とか『そりゃひでえ』などとかなり適当なあいづちを打つて笑つていたが、それでも一応話を聞いてくれている。

多分ほとんど聞き流していたんだらうけれど、その適當さのせいで、『もつとちゃんと聞いて！』とムキになつて、これまで親に虐げられてきたこととか、ラウの店では無給で働いていたの

にこの仕打ちなどと、愚痴とかもふくめ、洗いざらい喋ってしまった。

多分私は相当酔っていた。厩番の作ったホットワイン、酒精は全然飛んでいなかったと思う。

「……それでね、もうなにもかもイヤになって、こんな家燃やしちやおうって思っちゃって……なんでだろう？ 頭おかしいよね？ 私どうかしてた……って、ねえ、聞いている？ 今ちよつと寝てなかった？ ねえ、あなたが訊ねたんだから最後まで聞いてよ。だから寝ちやダメだってば……」

「うーん、うん、聞いている聞いてるすげー聞いている。あれでしょ？ 婚約者が尻丸出しにしてて面白みともなかったって話でしょ？ 一生言われるよねそれ。男として一番恥ずかしいやつだわー。結婚式に衣装部屋で浮気とか、なんか背德的なカンジがして、ちよつとのつもりが尻を出すほど盛り上がっちゃったんだろーねー」

「違いわよ！ 確かにみつともないって思ったけど、今お尻の話はしてない！ だからねえ……私……ええと、なんだっけ……ねむ……」

「あーお嬢さん今日は色々あつて疲れてんでしょ。疲れた頭で色々思いつめるからおかしなこと考えるんですよ。とりあえず休んだらどうですか？ よく寝たら気持ちもスッキリしますって。ホラホラ、ねんねしなー」

「ん……この枕、臭い……」

「あーおっさん臭いすか？ まあ慣れればイイ匂いですよ。はい、おやすみなさい」

こんな臭くて硬い寝台で寝られるわけがないと言おうとしたが、本当に疲れ切っていたらしく、瞼を閉じると気絶するようになつてしまつてしまった。



目が覚めて見知らぬ天井が目に入り、一瞬自分がどこにいるのか分からなくて混乱しかけたが、でもすぐに『あ、厩番の部屋だ』と思いつく。

音を立てないようにそつと体を起こした。

外はまだ夜が明ける前で、空が白み始めたばかりのようだった。

部屋を見回すと、厩番は床の上で酒瓶を枕にしていびきをかいて眠っている。

私がベッド（と呼ぶには粗末すぎるが）を占領してしまったからだ。そしてよくよく思い出してみると、酔いに任せ、とんでもない愚痴を聞かせてしまったような気がする。

なにをやってるのかしら私は……。

「でも……あの時、この人につかかってよかった……」

厩番にぶつかる前、本気で家につけようとしていた。冷静になると、なんて恐ろしいことを考えていたのかと怖くなる。

そんなことをしたら、寝入っている両親やレーラも、お腹の赤ちゃんまでも殺してしまうかもしれないのに、あの時はそんなこと気にかけもしなかった。

なにかも滅茶苦茶にしたいという破壊衝動に突き動かされていて、厩番に会わなければ本当に実行していたかもしれない。

冷静になった頭で考えると、自分のしようとしていたことが信じられない。でもあの時はそれが

いい考えのように思ったのだ。そんなわけがないのに。

自分がしようとしていたことなのに、恐ろしくて私は自分の身を抱いてぶると震えた。この男が、私の顔が鬼のような形相だったと言ったのは真実だった。

確かにあの時、私は鬼になっていた。

人はこんなにも簡単に常識とか良心とかを忘れてしまえるものなんだ……。

本当に、そんなことにならなくて良かったと、心の底から安堵する。

はああ、と私が深いため息をつくとき、声が聞こえたのか厩番がビクツとして目を覚ました。

「んあ……？ あつ、いてて寝違えた……あ、お嬢さんおはようございます」

「おはようございます。あの、ベッド占領してしまつてごめんなさい。それと、昨日は……色々ありがとございました」

「んー？ ああ、いいですーです。俺の臭い枕に顔を擦り付けてスヤスヤ眠るお嬢さんを見れて得した気分なんです。うん、よく寝られたみたいですね、顔色もいい。いつもの綺麗なお嬢さんに戻ってますよ」

「そ、そうですか……？」

綺麗なお嬢さん、と言われちょっと戸惑ってしまふ。が、厩番はあくびをしながら喋っているの、適当に言っているだけとは分かつている。寝起きで髪も顔もぐちゃぐちゃのはずなのだから、綺麗なわけではない。

「んで、なんでしたっけ？ 昨日の話ですけど、元婚約者さん。レオ君？ エロ君？ とかでしたっけ。なんならお嬢さんの代わりに、顔面ボコボコにしてみましたか？ んー特別に銅貨三枚

で引き受けちゃいましょう」

「レオでもエロでもなくラウよ。そんなことしなくていいですよ。あなたそんなことしちゃったらさすがにウチの厩番をクビになりますよ」

「あーいいんです。そろそろこれも辞めようと思ってたんで。それより本当にいいんですか？ このまま何も報復しないで、妹さんとの結婚を祝福するつもりですか？ 前歯の二本くらい折って間抜けなツラにしてやれば、ちよつとはすつきりすると思いますよ」

妹との結婚、と言われ、それを考えるとまた黒い気持ちがあくまくと湧き上がってくる。

あんな風に裏切って私を傷つけた二人が、なにごとくも無かったように結婚式をあげて幸せになるなんて、どうしたって許せるわけがない。祝福なんて、それこそ死んでも無理だ。

私を着られなかった婚礼衣装を着て、結婚式をあげる二人を目の当たりにしたら、やっぱり正気でいられる自信がない。

だからといって、厩番に頼んでなにか報復をしてみました……きつと私は止まれなくなる。

昨日の夜のように、黒い感情に身を任せて一線を越えてしまったら、もう常識も良心もなにもかも私は失くしてしまうと思う。

見ているからツラいんだ。

言葉を交わすほど、私は傷つけられる。

近くにはどうしても黒い感情が大きくなる。

なにかをしないでかす前に、私はここから離れるべきなんだ。それに気づいたことで、自分が進むべき道が見えた気がした。

「……いいんです。それよりも、私、家を出ようと思います。正直、このまま二人の姿を見ていたら、憎む気持ちを抑えられないと思うんです。ここに居たら二人と関わりたくないでいられないし、顔を合わせたら自分がどうなってしまうか分からなくて。だから、もう物理的に離れて、自分の気持ちを整理したいんです」

「へええ。じゃ、この町から出て行くってこと？ アテはあるんですか？」

私の発言に厩番はちよつと驚いたように目を瞠みはっていたが、煽あおるような物言いで訊いてくる。

「アテなんてないけど、ここにいるよりどこでもマシでしょうから。幸い、店でやらされていたから算術も帳簿付けも得意だし、家事も裁縫もできるからなんとかなるわ。今までの辛さを考えれば、なんでも耐えられると思うし」

厩番に答えるというより、自分に向けての言葉だったが、あえて口にするとなんだか気持ちが楽になってきた。

ここを離れても、昨日の悲しかった気持ちを思い出して泣いたりするのもかもしれないが、ラウのことも家族のことも、顔を見なければ忘れていけるかもしれない。新天地で、思い出す暇もないくらい忙しく暮らしていたら、いつか本当に忘れられる日が来るだろう。

まだ早朝だから家族の誰も起きてはいないだろうし、通いの掃除人も来る時間ではない。だから今のうちに荷造りをして、誰にも会わず今すぐ出て行こう。うん、それがいい。

自分の気持ちが決まって、やるべきことがはっきりすると急に目の前が明るくなったような気がして、やる気が出てきた。

よし、と気合を入れてベッドから立ち上がろうとした時、厩番が私を引き留めた。

「んじやあ、お嬢さん。俺が職場を斡旋するから一緒に行かないかい？ いいとこ紹介するからさ。女性が一人きりで旅するのは色々危険だし、俺が一緒なら用心棒にもなるデシヨ？」

「職場を斡旋……娼館とかに売り飛ばされる予感しかないので結構です」

「いやいやいや、俺そんな悪人に見えますう？ そんなことしませんよ！ 第一、お嬢さんみたいな綺麗で働き者で、仕事もできる人を娼館なんか売ったら勿体ないでしょ。あのねえ、ここみたいな大きな町は若い人がたくさんいるけど、田舎はとにかく人手不足でね、お嬢さんだったら引く手あまたですよ。まあ給金は安いだろうけど、良い条件の職場を紹介できるだろうから、まあとりあえず見てみてから決めてくださいよ」

髭面をニコニコさせながら厩番は言う。この男は、さらっと私を褒めてくるのでなんだかムズムズしてしまう。でも、こんな風に評価してもらえることなんて今までなかった。今までどれだけ頑張っても、私の家族は私のダメな部分をあげつらって決して褒めてなんてくれなかった。

赤の他人の厩番に褒められて、嬉しく思うより前にそんなことを思ってしまうなんて悲しいな、と乾いた笑いが漏れた。

この男は、単に私をおだてて騙して連れて行くつもりなのかもしれないが、もうそれでもいいかもしれないと思えた。

どうせ失うものなものでもない。それに女の一人旅が不安なのは確かだし、この町を出る手助けをしてもらえれば十分有難い。

「私、このまま家を出るつもりですよ？ 二、三日とか待てないですよ？ あなたはそれでいいんですか？ 職場放棄してこのまま出奔する気ですか？」

「んーでも今月給金払われてないし、仕事もアレコレ増やされてしんどかったから、そろそろ潮時
かなって思ってたんで、ちょうどいい機会ですよ。そうと決まったら行きましょう！ みんな起き
出してくる前に荷造りして家を出しましょう！ ね！ ホラホラ急いで！」

追い立てられるように厩番の小屋から出される。

決めた以上やるしかない。私は窓から自分の部屋に入り、クローゼットから衣服を取り出して急
いで荷造りを始めた。

抽斗ひきだしの中には、実は長年貯めてきた私のお金が隠してある。ラウの店では無給で働いていたとは
いえ、時々お駄賃をもらうこともあった。よそのお店を手伝って、お手当を頂くことも結構あった。
そういうものを、いざという時のためにずっと貯めておいたのだ。

ラウと結婚して彼と家業を一緒にやっていると決まっていたのに、私はずっとこの『いざという
時』のお金を見つからないように貯めていた。

私は心のどこかで、この結婚がうまくいかないんじゃないかと思っていたのかもしれない。

そしてこんな風に逃げ出すための準備を無意識にしていたのではないだろうか。手元にあるお金
を眺めながら、私はそんなことを思う。

小さな鞆に着替えなどを詰めて、お金はいくつかの袋に分けて鞆や服の内側などに隠して入れる。
他になにを持っていくかと部屋を見回す。

ふと、棚にある栞しおりの挟まった本が目に入って、迷いつつ手に取り鞆に詰めた。

荷物を詰め終わると、驚くほど小さくまとまった鞆ができあがった。持っていきたいものなんて
ここにはほとんどなかった。

そして、少し迷ったが、書き置きを残すことに決めた。自分の意思で出て行ったのだと示しておく必要があると思っただからだ。

『出て行きます。さようなら』

他に書く内容も思い浮かばず、一言だけ書いて机に置いた。色々考えたが、家族に伝えたいことも何もなかった。

鞆を持って窓を乗り越えようと、そこにはもう厩番が待っていた。

「お、荷造り早いね。じゃあ行きましようかお嬢さん。ホラ乗って」

「えっ？ 馬？ え、これウチの馬でしょう。乗っていったら泥棒に……」

見覚えのあるウチの牝馬ひんばが、鞍くらを付けられていい子に待機している。私が止めるのも聞かず、厩番は私を担ぎ上げ鞍に乗せて自分も後ろにひよいと乗って、さっさと駆け出してしまった。

「お嬢さんの馬でしょー？ だったらお嬢さんが乗っていったっていいじゃないの。手切れ金だと思ってもらったことにしましょうや」

「手切れ金……？ うーん、そうなのかしら？ ねえ、もう私家を出たんだからお嬢さんじゃないの。だからそんな呼び方しないで、普通にディアがいいです。あとあなたの名前も教えてくださいませんか？」

「おお、そうか、そうな。俺の名前はジローだ。かわいくジロちゃん♡ て呼んでくれてかまわんよ。よろしくな、ディアさん」

「ええ、道中よろしくおねがいますジローさん」

「うーん、そういうカタい感じも悪くないねー」

朝日が照らす道を、馬は駆け足で走っていく。

昨日までは、一生この町で暮らしていくのだと思っていたのに、私はこうしてよく知りもしない男と馬に乗り、誰にも別れを告げずに出て行くのだ。

「なーんか愛の逃避行みたいでいいねー。何もかも捨てて、愛に生きる！ みたいな？」

ジローさんは軽口を叩いてのんきそうに笑っている。適当なことばかり言っているように見えるが、ひよっとして私が落ち込まないように明るく茶化してくれているのかもしれないな、と少しだけ思った。

「そうですね、何もかも捨てて逃げるんです私。家族も、元婚約者も、嫌だった気持ちもぜんぶ捨てて、人生やり直すんです。これからは自分のために働いて、自分のために生きようと思いません」

そうかそうかと言ってジローさんはまた笑っていた。



第四話 『希望と逃避』



勢いのまま飛び出してきてしまったが、よく考えると、身元も不確かな男と二人旅など、何かさ
れても文句は言えないのではと、頭が冷えて冷静になってから気づいた。

ただどあの町に戻る選択肢は私にはない。たとえなにかあっても女一人旅よりはましだろうと腹
をくくった。